

甲斐市立双葉中学校 自己評価書

令和 7 年 1 月 27 日 (月) 作成

校長 「 興石 信 」 記述者 職名 (教務主任) 「 深沢 俊一 」

学校教育目標 「主体的に学び、心身ともに健やかで、人間性豊かな生徒の育成」

学校経営方針

- ・全教職員で、生徒・保護者との信頼関係の下に、生徒や地域の実態を考慮して、活力に充ちた特色ある明るい学校づくりに努める。
- ・学校教育目標「主体的に学び、心身ともに健やかで、人間性豊かな生徒の育成」の具現化に向け、特色ある教育課程の編成と実施に努める。
- ・基礎的・基本的内容の指導の徹底と、定着を図る授業づくりを進める。
- ・知識技能を活用し、自ら考え、判断し、表現する力を育んでいく。
- ・自らの個性・特性を理解し、主体的に進路選択ができる能力を育てる。また、発達段階に応じた体系的なキャリア教育の推進を図る。
- ・教育活動全体を通して、知・情・意・体の調和のとれた人間性を養い、道徳的実践力と思いやりの心を持った生徒の育成を目指す。
- ・健康安全に関する理解を深め、基本的生活習慣を身につけるとともに、文化・スポーツ等に親しみ、自ら心身の健康を高める生徒の育成に努める。
- ・職員の能力・特性を活かし、協働体制による活力ある学校運営を行う。

(1) 豊かな心の育成

- ① 教育活動全体を通して、校訓「至誠」を大切にし、思いやりの心やお互いを尊重する態度を育成する。
- ② 本校の宝である「至誠の鐘」、「日本一の玄関」、「ロッカーの整理整頓」、「朝読書」等の取り組みを継続、発展させ、学校への愛着や誇りを醸成する。
- ③ あいさつは人間関係 (コミュニケーション) づくりの第一歩であり、社会人としての基本要素となる重要なものであるとの認識を生徒・教職員で共有し、登下校だけでなく学校生活全体を通してあいさつを習慣化するとともに、地域においてもあいさつができる態度を身に付ける。(まずは、教師が生徒や来校者に積極的にあいさつをする)
- ④ 学級活動、道徳等において、ジェンダーや多様性について考える機会を計画的に設けることにより、性別、国籍、能力等による不必要な区別を学校生活からなくし、一人一人を一個の人間として尊重する態度を養う。
- ⑤ 委員会活動、学級活動等において、SDGs の取り組みを推進するとともに、生徒一人一人が自分の生活を SDGs の視点から見直し、現代の社会にあったよりよい生き方について考え、実践していこうとする態度を身に付ける。また、こうした取組を通して、今日的で世界的な課題への関心を育て、これからの社会を担っていく一員であるという自覚を醸成する。

(2) 誰一人取りこぼさない生徒指導・生徒支援

- ① 日頃から、声かけやコミュニケーションを大切にし、一人一人の生徒の状況の観察や把握を丁寧に行い、生徒が発する兆候を見逃さないようする。また、定期的なアンケート調査や Q U 調査等を生かし、生徒の実態把握を補完する。さらに、教職員間で日常的に情報交換を行うことで、不登校や学校不適応、いじめ等の未然防止、早期発見・早期対応を心がける。問題発生時は、的確な情報収集により、最善の方法を考え、組織的かつ迅速な対応を図る。
- ② 生徒はすべて発達の途上であること、また一人一人が成長や発達の速度が異なることを

常に念頭に置き、生徒に寄り添う態度で接することを大切にする。その際、性急に答えを求めたり結論を急いだりせず、生徒自身が自己決定できるように、支援者的、伴走者的立場を心がける。（自己決定を促す三つの言葉、「どうしたの」、「どうしたいの」、「先生には何ができる」を大切に）

- ③ 生徒一人一人が自己肯定感や所属感が感じられるような学級集団づくりを行う。そのために、一人一人に適切な役割と支援・評価を行い、一人一人が学校を自分の居場所として感じられるようにする。また、学校に来られなかったり所属学級に入れなかったりする生徒の居場所として、「ほっとスペースこすもす」の効果的な運用を進める。
- ④ 特別支援学級をはじめ通常学級にいる支援を必要とする生徒、生徒指導上の課題を抱える生徒の状況を校内支援部会、生徒指導部会で定期的に把握、情報共有し、適切な改善及び支援の方策を講じる。その過程においては、保護者との連携を図り、必要に応じてＳＣやＳＳＷといった専門スタッフに適切に関わってもらう。

（３）望ましい人間関係の形成

- ① 良好な人間関係を作っていくためには、自分の気持ちをわかりやすく伝えるとともに相手の気持ちを言葉や態度から受け取って返していくコミュニケーション力が必要であることから、朝の会や帰りの会等の学級活動の時間を利用して、お互いの考えを伝え合い聞き合う場面を計画的継続的に設ける。
- ② 学級活動や委員会活動、部活動等において、自分たちの活動を振り返り、課題を見つけ、その改善の方法を考え、実行する過程を大切にする中で、自分たちの生活を自分たちの手でよりよいものにしていくとする態度（自治の力）を身に付ける。
- ③ 学級活動や生徒会活動、学校行事等を通して、生徒の居場所づくりや絆づくりに努め、自己肯定感を涵養するとともに、その取り組みを通してお互いの良さを見つけたり認め合えたりするようにする。
- ④ 職場体験学習等の啓発的体験活動の充実を図るとともに、学級活動を中心にして、「キャリア・パスポート」を活用して、生徒一人一人の社会的・職業的自立のために必要な基礎的・汎用的能力（人間関係形成・社会形成能力、自己理解・自己管理能力、課題対応能力、キャリアプランニング能力）の育成を図る。また、各教科、各行事においても、これらの能力の育成を念頭に置き、授業展開や取り組みの過程において、学校で学ぶことと社会のつながりを意識できるようにする。

（４）学びの楽しさを育てる学習指導

- ① 各教科において、「授業七つの心構え（改訂）」を徹底し、授業に臨む基本的な姿勢を身に付けさせることで、「主体的・対話的で深い学び」の土台となる、落ち着いた学習環境を作る。
- ② 各教科において、年度始めや単元の始めに、生徒に身に付けさせたい資質や能力（評価の視点）を生徒に伝えることにより、生徒一人一人が目的意識をもち、主体的に学習に臨む態度を身に付けさせるとともに、透明性のある評価に資するようにする。
- ③ 各教科において、授業場面や評価問題の中に、自らの考えを記述する内容を計画的に取り入れることにより、自分の考えを整理し、まとめる力を身に付ける。
- ④ 各教科において、単元の過程に問題解決的な学習を計画的に位置づけ、生徒同士や生徒と教師による対話機会を積み重ねることで、一人一人が考えを広げ深められるようにする。
- ⑤ 各教科において、学習の振り返り場面を用意することで、自らの学習態度や学習の成果・課題に気づかせることにより、自らの学習を調整していく力を身に付ける。
- ⑥ 各教科において、ＩＣＴを効果的に利用することにより、学習意欲及び学習効率の向上を図る。
- ⑦ ①～⑥を実施することにより、それぞれの生徒が、確かな学力の定着（知識・技能、思

考・判断・表現)、学びに向かう人間性の調和のとれた発達)ができるようにしていく。

(5) 健康・安全教育の充実

- ① 健康3原則(栄養、睡眠、運動)を推進し、望ましい生活習慣を確立させるとともに、日頃から自分自身の心身に関心を持ち、健康な状態を保つために自分でできることを実践する態度を身に付ける。
- ② 体育的行事や部活動等を通して、体力の向上を図るとともに、最後までやり抜く粘り強くしなやかな心を育てる。
- ③ 避難訓練等を通じて、自助・共助の精神を涵養するとともに、日頃から安全について考え、災害時に適切に判断し行動できる実践的な能力や態度を育てる。
- ④ 学校施設・設備の点検を確実にを行うとともに、教職員・生徒とも整理整頓を励行し、安全な生活環境の保持に努める。また、絶えず危機管理マニュアル等の見直しを行い、安全で安心な学校づくりに取り組む

(6) 地域・保護者とともにつくる学校

- ① 「社会でよりよく生きていくための資質や能力、態度を育てる」という目的を、学校と保護者が共有し、子どもを育てるパートナーとして、信頼・協力関係を構築し、学校、家庭がそれぞれの役割を果たす中で、一人一人の子どもが全人的な発達を遂げられるようにする。そのために、たよりやホームページ、連絡網等を活用し、学校の考えや生徒の様子を積極的に発信し保護者の学校への理解を深めるとともに、保護者の考えを聞く機会を計画的に設け学校教育に生かしていく。
- ② P D C Aによる学校評価を生かした教育活動の組織的・継続的な学校改善に努めるとともに、本年度から設置となる学校運営協議会制度(コミュニティスクール)の効果的な運用について検討し、学校運営に保護者や地域の方が効果的に参画していくための枠組みづくりを進めていく。
- ③ 「地域の子どもは地域で育てる」という考えに立ち、地域の方に学校の教育活動を理解してもらうための方策を講じるとともに、地域の方に学校の支援(地域の方が学校に入る、子どもたちが地域に出て行く)をしてもらうための体制づくりを行う。
- ④ 今あるつながりを生かし、学校ボランティアとして、出前講座や奉仕的な作業に、保護者や地域の方に参加してもらうことを積極的に進めていく。同時に、地域の一員として、生徒が地域に貢献できる活動や地域の方と共同して取り組んで行く活動を考え、実施していく。

(7) 働きたいと思える学校づくり

- ① ウェルビーイングの考えに基づき、一人一人の職員が働きたい(働きやすく、働きがいもある)と思える学校づくりを職員全体で進めていく。
- ② 学校は子どもの学びの場であると同時に、「大人同士の学び合いの場」とあるという認識に立ち、学校を職員一人一人にとって心理的な安全性が感じられる職場風土を醸成していく。そのためには、職員一人一人が職場風土を作る当事者としての意識を持ち、普段からのコミュニケーションを大切にする。(特にリーダー的な立場やベテランの職員が率先して取り組む)
- ③ 管理職は適切な校務分掌配置を工夫するとともに、学校運営委員の協力を得て、業務等の集中や偏りにより過剰負担となっている職員がいないかを把握し、必要に応じて、年度途中であっても校務分掌の見直しについて検討する。
- ④ 時間外勤務を縮小し過重労働を避けるため、学校行事や生徒会活動等、諸活動の目的を明確化、焦点化するとともに、取組方法等の工夫改善を常に心がけ、取組時間の縮減と教育効果の両立を図れるようにする。
- ⑤ 計画的な年休取得を職場として進めるとともに、職員一人一人がそれぞれ異なる家庭環

境や家族状況を抱えているとの前提に立ち、お互いに休みやすい職場風土を醸成する。 ⑥ 一人一人の職員が働き方改革の当事者としての意識をもち、常に自分の働き方を振り返り、個人としてできる小さな業務改善に取り組む。	
1 全体評価 ・教師自己評価 今年度も昨年度に続き、AB双方を合わせると肯定的評価の項目が多い。 Ⅱ. 学校運営, Ⅲ. 学習指導, Ⅳ. 生徒指導でも、AB双方を合わせると90%を超える高い数値が見られ、教職員の教育活動への取り組む意識の高さがみられた。その中で「地域の人材や施設を活用し、地域の教育力を生かす指導を行っている」はC評価（ややそう思わない）が26.5%となった。今年度はコミュニティスクールが発足1年目だったので、来年度はさらに教育活動に広く還元していきたい。 ・生徒アンケート 全体としてAB評価を合わせると80～90%と良好な結果であった。特に伸びが大きかったのは「困ったことがあったら、相談ができる先生がいますか」の項目で、A評価が昨年比7ポイントの上昇となった。また「だれとでも挨拶をしていますか」はA評価が昨年比5ポイント上昇。生徒に寄り添った指導を組織的・継続的に行い、生徒が自己有用感や充実感・成就感を味わえるような集団づくり、授業づくりの工夫に努めたことがこのような結果につながったといえる。 ・保護者アンケート 全体としてAB評価を合わせると80～90%と良好な結果であった。「学校は楽しいところだと思う」はA評価が昨年比5ポイント、「授業参観や学校開放日などは、子どもの様子を知るよい機会になっている」は6ポイントの伸びとなるなど、活動の様子を広く認知していただいたことが全体的にAB評価が上昇する結果につながったと考えられる。	
2 項目ごとの評価結果（達成状況・改善策）	
Ⅰ 学校教育目標に関して・学校経営について	
達成状況	5項目中、4項目でAB評価が100%という高い結果となった。唯一、「PDCAサイクルを生かした教育活動を行っている」がAB評価98%であった。昨年数値の低かった、「学校教育目標の具現化に向けた協力体制がとられている」が100%という好結果であった。教員数が十分に確保できない中でも、学校教育目標の実現を目指し、協働して日々の教育活動を推進してきたことを示すものといえる。
改善策	① コロナ禍が明けて改めて行事や活動の見直しを行ったことも多かったが、職員の働き方改革を進める上でも、学校行事等の検討を引き続き行う必要がある。またコミュニティスクールの意見も取り入れながら、職員全体でPDCAサイクルを生かした教育活動の方向性を推進していく。 ② 学校教育目標の具現化に向けて、協力体制を取りながら、子どもを中心に据えた教育活動に取り組んでいく。
Ⅱ 学校運営について	
達成状況	8項目中7項目でAB評価が90%以上である。職務について職員一人ひとりが責任感をもって協働体制をとりながら、取り組んでいる。2, 3, 4番の項目では全員がABという肯定的評価であった。そんな中、8番の項目「特別支援教育の体制が整い機能的に行われようとしている。」でC（そう思わない）が11%となった。

改善策	① 今年度は教員が不足し、授業をはじめ校外学習の引率等においてサポート体制を十分にとることが困難な状況であった。通級指導も今年度は実施されず、支援が十分とはいえなかった。来年度は教員数の確保と通級指導の再開を引き続きお願いしたい。 ② 校内支援委員会で連絡を毎週行い、生徒一人ひとりにあった対応の検討・確認を来年度も継続し、より多くの教員が関わりながら支援学級の生徒たちを取り残さない組織体制づくりを進めていきたい。
Ⅲ 学習指導について	
達成状況	7項目中6項目でAB評価が90%以上となった。また、すべての項目でA（とてもそう思う）評価が昨年よりも10ポイント以上アップした。特に「本時の目標を明確に提示」ではAの解答が昨年比30ポイントアップの63%と高かった。「ICTを活用した授業を行っている」だけはC(ややそう思わない)が10.3%となった。
改善策	① 「ICTを効果的に活用した授業を行っている」においてA評価が27%と昨年比10ポイントアップし、C評価が10%と昨年比で7ポイント減少している。活用方法について教員間で情報共有し、共通の授業スタイルをつくることで一定の成果が出ているといえる。これからもICTの効果的な活用方法について研修を実施するなど、積極的にICTを取り入れる取組みを推進していく。 ② 今年度から「個別最適な学び」が注目され校内研究でも講師を招いて研修を行った。来年度も「個別最適な学び」について研鑽を重ね、生徒の学びの意欲を喚起する授業づくりに取り組みたい。
Ⅳ 生徒指導について	
達成状況	6項目すべてでAB評価がほぼ100%に近い値となった。生き方教育（キャリア教育・進路指導など）においては、昨年度CD評価が10%を超えていたが、今年度はDが0%、Cが3.2%と改善した。
改善策	① 生徒指導の未然防止や早期発見、対応、また不登校、いじめ、支援に関わる本校のシステムの見直しを一層進めていく。生徒の抱える課題に対して共通認識をもって、組織的かつ迅速、適切な対応ができるようにする。 ② キャリア教育の目的を全職員で共通理解してキャリア教育に取り組む。
Ⅴ 地域との連携について	
達成状況	6項目中4項目でAB評価が100%であった。「PTA活動に主体的に参加」がAB評価94%、「地域の人材や施設を活用し地域の教育力を生かす指導を行っている」がAB評価74%であった。「地域の教育力を生かす指導」は昨年に比べAB評価が10ポイント上昇している。今年度は職場体験において地域の小学校や保育園等にも協力いただき地域の教育力を生かす機会が広がりつつある。
改善策	① 地域の教育力を生かす指導については、キャリア教育（進路学習、職場体験等）を行う上で欠くことのできないものであり、より一層の連携と拡充を進めていきたい。またコミュニティスクールとの連携により学校教育目標の実現を図っていく。 ② 学校への理解を深めてもらうために、ホームページや各種通信等による情報発信を今後も進めていきたい。
Ⅵ 学校の特色に関して	

達成状況	4項目すべてでAB評価が100%もしくは100%に近い値となった。「読書活動に取り組むよう指導に努めている」と「生徒が進んで挨拶を行うよう指導に努めている」の項目で昨年に比べA評価が大きく上昇した。学習環境整備についてもAB評価が5ポイント上昇して100%となった。読書に充てる時間については、保護者アンケートでは上昇しているが生徒アンケートではわずかながら減少している。
改善策	① 挨拶指導でA評価が20ポイント近く向上し、生徒の自己評価「誰とでも挨拶していますか」のA評価も向上した。これからも教職員一体となって指導に努め、挨拶が活発で居心地のよい学校にしていく。 ② 朝読書の指導によって朝読書活動は定着している一方で、生徒が家や図書館で読書する時間は全体的にわずかながら減少している結果となったので、帰宅してから読書する習慣をつけるように促していく。

VII 創甲斐教育について

達成状況	3項目すべてでAB評価が100%近い数値であった。特に「言語活動の充実を意識した授業を行っている」のAB評価は昨年に比べ30ポイント以上の伸び、また「話し合い活動を通して自分の考えを発表する場面を積極的に取り入れている」についても20ポイント近い伸びとなった。
改善策	・「主体的・対話的で深い学び」の理念の軸になる言語活動や話し合い活動なので、来年度以降も教職員全体で意識を共有して、取り組みを進めていきたい。

3 まとめ

○教職員の数が十分とはいえない中で、一人一人が教育目標や重点目標を踏まえ協働して教育活動を推し進めた1年となった。またICTを活用した学習指導が広く展開され、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善が大きく前進した。来年度も教員が十分に確保されるかは未知数であり、教員の働き方改革も考えながら学校教育目標の具現化に向けた協力体制をつくってよりよい学校運営につなげていきたい。

〈成 果〉

- ・チーム双葉中として組織的に学校課題に取り組み、「学校教育目標の具現化に向けた協力体制」の数値が大きく上昇している。
- ・「学びを喚起する授業」の数値が上昇しており、新指導要領にある「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善に取り組んでいる成果が現れている。
- ・生徒指導、学校の特色でも一定の数値が得られた。教職員が入れ替わっても、質の高い教育活動が展開されている。
- ・PTA活動への参加が4年連続上昇。「学校に対する要望等を聞くなどの機会を設け情報収集を行っている」の数値が大きく上昇している。
- ・生徒は学校の特色を理解しており、多くの活動に積極的に取り組んでいる状況がみられる。保護者も多く学校に理解を示している。

〈課 題〉

- ・ほぼすべての項目でA評価が上昇しているが、これからも学校教育目標を踏まえ経営方針の具現化に向けた教育活動を推進していく。
- ・特別支援教育の体制が十分とはいえない面がある。生徒個々の実態に応じて、生徒に寄り添った指導ができるように教員数の確保や通級指導の体制が展開できるようになるとよい。

